

# 天草地区高段者研修会開かる

益田克法

平成十九年四月二十一日(土)、天草市総合武道館剣道場で開催された。

この講習会のねらいは、天草地区の少年剣道の指導者として指導力をつけたい者、高段位を受審する者、自分の剣道のレベルアップを図りたい者、その他様々な目的を持つ剣道愛好家全般に対して、一流の八段講師から直接指導を受け、今後の稽古の指針にってもらいたいとの、特に花里会長の強い思い入れから実現したものである。講師にはおなじみの西山弘範士八段、尾方正照教士八段にお来し願った。初めに尾方先生から審判法について講話をいただいた。「試合というものは第一試合が最も大事である。この審判でびしっとすることで大会全体が引き締まり、試合者も審判も良い修行ができる。瞬間の妙技を見極めること。良い技をとり損なうことがないように不動心で裁くこと。これらのためにも自らの稽古を怠りなくすること」という趣旨の事柄が強く印象に残った。

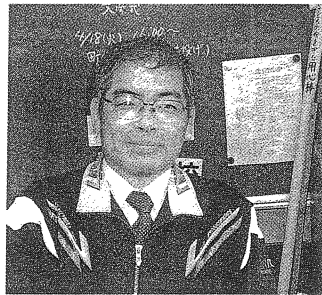
次に日本剣道形の稽古に移った。今回は特に小太刀三本を集中的に指導していただいた。小太刀の命は「入り身」と「鎧の使い方」。大太刀の三本目から七本目まですべてに鎧を使い相手の刀をしのぐ、押さえる、切り結ぶ、擦り上げる、などの鎧を使う技があるが、小太刀の鎧の技は更に難しく、左右の擦り上げ、擦り落とし、擦り流し、擦り込み、と参加者はみんな四苦八苦、中には順番をしつかり覚えていない方もおり、尾方先生は忙しく立ち回って各人のレベルに応じた指導にあたっておられた。

模範審査に移り、大まかな段位ごとに立ち会いを実施し、直後に両講師から講評をいただき、今回は模範審査票に記入していただいた。それぞれお褒めの言葉をいただいたり、逆に厳しい批評をいただいたり、参加者は皆平素の剣道を見つめ直す良い機会を得たことと思う。与えられたヒントを今後の普段の稽古に生かしてほしいと思う。そうすることで次の段階が見えて来、自ずと個々人の剣道のレベルが向上すると思う。

最後に指導稽古になった。西山先生は相変わらず老練の技に先の技を織り交せて悠々としかも洗刺と若い剣士を捌いておられた。尾方先生は言うまでもなく、あの逃がさない厳しい攻めからの怒濤の打ちと、一寸の見切りからの返し技などで鍛えていただいた。

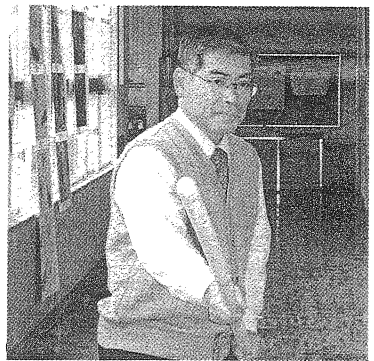
## 剣道を学校経営に生かす

前・球磨郡五木村立五木北小学校 校長 泉 眞喜夫



この研修会ですぐ私達の剣道が変わる訳ではない。しかし学んだこと、感じたこと、目標にしたこと等を日頃の稽古で実践していくなかでこそ確実に私達の剣道自体も剣道観もレベルアップすると思う。百鍛千錬、朝鍛夕錬、百錬自得、切磋琢磨、そして交剣知愛(剣を交えてあや又この人と稽古したいと、おしむを知る)を!

私は、五和東中学校の一年生から剣道を始めた。天草高校、熊本大学でも剣道部に所属し、卒業後、教員になってからも、いろいろな方々の支援を受けながら、これまでどうにか剣道を続けることができた。校長となつた今、これまでの剣道修行で培ったことが学校経営に大変役に立っていることを実感する毎日である。その一例を紹介したい。



私を構える用心棒

利になってしまふ「さすまた」よりも、相手を威嚇するには、この「用心棒」の方が有利であることは間違いない。私は、不審者が侵入してきた時、相手を威嚇してひるませ、子どもたちを逃がすための時間稼ぎをするための用具として「用心棒」を考案した。年度初めに、全職員に対して、構え方、間合いをとるための足さばき、威嚇または実際に相手が向かってきた時のための突きの動作、刃物を打ち落とすための小手打ちの動作、相手をひるませるかけ声等、私自身が模範を示し、くり返し練習させて、いざという時に備えている。職員には、「長さでは圧倒的に有利なので、自信を持って構えなさい」とアドバイスしている。

◎礼儀の本質を教える 「剣道は礼に始まり、礼に終わる」とよく言われる。道場に入る時に礼をする、稽古が始まる時や終わる時には正面とお互いに礼をする、道場から出る時にも礼をする。このように、剣道をする時には、常に礼をしなければならぬ。子どもたちや職員には、学校への出入り、教室への出入り、学習の始めと終わり、部活等で体育館や運動場への出入りの時には必ず礼をするように指導している。なぜ礼をしなければならないか。学習や運動などで前日より一歩でも進歩しようと思えるならば、「自分はまだ未熟者です。一生懸命に頑張りますので、よろしくお願いします」という謙虚な心が必要である。「自分は強い」とか「上手だ」などと思いがつた心では進歩はない。それに、一緒に学習してくれる友達や教えてくれる先生がいたからこそ、進歩することができたし、体育館や運動場があったからこそ、練習して上手くなることができたという気持ちを持ち、それに対して「ありがとう」という感謝の心も必要である。このように「謙虚な心」と「感謝の心」から礼をすることを児童や職員に伝え、実行させている。

※筆者は現在、水俣市立水東小学校に勤務